

熱帯雨林保全のために、 稲作の普及に取り組んでいます。

プロジェクトパートナー/財団法人 オイスカ、NPO法人 APSD
助成金額/バブアニューギニア:13,000,000円
ソロモン諸島:12,000,000円

熱帯雨林の破壊は、地球温暖化*を加速させるだけでなく、樹木によって地上に固定されている土壌が、雨とともに海に流れ込み、珊瑚礁などの生態系にも深刻な被害を与えます。私たちは、熱帯雨林保全のために、バブアニューギニアとソロモン諸島で、「焼畑農業」から「定地型有機農業」への移行を支援しています。

これらの地域では、伝統的な焼畑農業によってイモなどの食糧生産が行われてきました。しかし、近年の急速な人口増加により、自然の再生スピードを超えて焼畑農業が行われるようになりました。また、貧困問題の深刻化により、現金収入を目的とした商業伐採も加速しています。

私たちは、何度も現地に足を運ぶことによって、熱帯雨林の破壊を食い止めるには、植林という直接的な修復よりも、森林破壊の原因となる「食糧難」と「貧困問題」を解決することが重要であることに気がきました。それには、稲作と



精米機が寄贈された村の様子

畜産などを組み合わせた、日本で広く行われている「定地型有機農業」の普及が有効です。土壌を衰えさせることなく、同じ場所で持続的に食糧生産が行え、さらに米の輸入に使われている貴重な外貨も節約できるからです。

* 熱帯雨林は多様な生物を育むだけでなく、温室効果ガスである二酸化炭素を吸着する役割も担っています。温室効果ガスが増大すると、地球温暖化が加速します。





ウボル村の精米機寄贈式に参加した
コスモ石油社員の声

「動き出した精米機から真っ白な米が現れると、大きな歓声が上がりました。これまでは、収穫した米を230キロ離れたラバウルまで運んで精米していたのです。今後、この精米機が大いに活躍することを願っています。」

2002年度に精米機を寄贈した村
イーストニューブリテン州 ウボル村
イーストニューブリテン州 デュークオブヨーク
イーストニューブリテン州 CIS

克蘭プン村ライスプロジェクトスタッフ
トーマス・ケモさんの声

「2001年に、精米機が村に来たので、自分たちで手軽に精米できるようになりました。それまでは、150キロ離れた精米所まで米を運ぶ必要があったのです。私たちは、村の発展を誇らしく思います。村人一同、心からお礼を申し上げます。」



伝統的な踊りで、スタッフの訪問を
歓迎する村の人々



2003年度は、2地域に精米機を寄贈する予定です。稲作普及による定地型農業への移行を継続的に支援します。

パプアニューギニア での活動

パプアニューギニアのラバウルにある「エコテックセンター」では、パートナーの財団法人オイスカが、各地の村々からの研修生を受け入れ、定地型農業の研修を行っています。センターの卒業生は、それぞれの村で稲作の普及に努めています。私たちは、定地型農業の普及に拍車をかけるため、それぞれの村の焼畑農業の状況や稲作に対する意欲などを調べ、精米機を寄贈することにしました。2001

年度の克蘭プン村への寄贈は期待以上の効果をあげました。さらに2002年度は3つの村に寄贈を行いました。どの村でも稲作に対する意欲や、環境保全に対する意識は高く、これからの波及効果が期待されます。実際、パプアニューギニア政府は、米の輸入を減らすために、精米機の普及を図り始めました。

2003年度は、精米機の寄贈に加えて、稲作と並行して畜産を行い、循環型農業を実現するための飼料や肥料づくりへの支援を実施していきます。

焼畑が行われた後の
熱帯雨林





ソロモン諸島マライタ州(森林破壊によって、いたる所で土壌がむき出しになっている。)

ソロモン諸島での活動

ソロモン諸島では、人口増加による食糧不足に加え、1990年代の民族紛争によって外国資本が撤退し貧困が加速するなど、状況は悪化の一途をたどっています。

ソロモン諸島マライタ州フィユ村は、人口700人ほどの平均的な村で、イモなどの農作を中心に自給自足の生活をしています。私たちは、村の人たちを中心に、NPO法人のAPSDとのパートナーシップで、この村を循環型農業のモデ

ルビレッジにするとともに、農業普及リーダーの育成の場とするためのプロジェクトを推進しています。

2002年度は、村内のアクセスロードの敷設をほぼ完了し、さらに研修センターをはじめ、養豚施設やボカシ(有機肥料)小屋など、基本的な施設の建設に着工しました。研修センターは今年秋から冬には完成する予定で、これにより、定地での有機陸稲栽培に養豚・養鶏を組み合わせた循環型農業のための基盤が整います。





稲の発育をチェックする研修センター所属

マライタ州フィユ村での
コスモ石油エコカード基金
理事長のスピーチ

「私たちは短期間で活動を止めたりはしません。皆さんがその熱意を失わず、将来のために行動を続ける限り、支援を続けることをお約束します。」



ボカシ(有機肥料)小屋を視察する
エコカード基金理事長(左)と
ルーベンモーリー・マライタ州知事



スタッフ、NPO、現地の人たち

マライタ州
フィユ村の人たちの声

「人口が増えるに連れて農業の生産性は下がり、海では魚も減りました。森が減り、水害や干ばつなどの災害も増えました。早く悪循環から抜け出さなくては、子どもたちの未来はありません。同じ土地で生産性の高い食糧生産が続けられる有機農業は、ようやく見え始めた希望の光です。」



田植え直後の田んぼ



モデルビレッジのボカシ小屋(建設中)とアクセスロード

マライタ州フィユ村循環型モデルビレッジのプロジェクトサイト

